

子どもの本

研究会

【私の一冊】

『緑の模様画』 高樓 方子 作（福音館書店）

大橋 知賀子

私は、高樓方子さんの作品の世界観が好きで、ほとんどの著作を読みました。最初に出会ったのは、『時計坂の家』です。『秘密の花園』や、『トムは真夜中の庭で』のようだというのが読後の印象でした。高樓作品には、静謐な美しさがあると思います。ずっと高樓作品を読んでいって、とうとう十年前に本書と出会いました。

この本のモチーフとなっているのは、『小公女』です。物語中に『小公女』の文章が引用されています。海の見える坂の街で出会った三人の少女たち。出会ってたちまち心を通わせます。そして、寮生の間でまことしやかに噂される「寄宿舎のあるジंकウス」、三人でいるとき度々現れる「茶色の瞳の青年」、「街外れの塔の家」、「いつも不機嫌なおじいさん」等、不思議な出来事が次々に起こります。そして、謎を秘めたそれらの出来事が次第に明かされていくのです。高樓作品に多い、日常の中に現れるさりげない異世界の話ですね。

この作品は、思春期特有の感じやすい心、繊細でいながら真つすぐな強い心も併せ持つ不安定な少女たちを丁寧に描いてあります。はるか昔の、自分の少女時代を思い出して、切なくなりました。そして、読んでいる間とても幸せな気持ちでいられました。ただ一方では、過去と今、若さと老い、希望と絶望、生と死にまで及んで物語は大きなうねりを見せます。全体的に、どこか懐かしさ漂う優しい雰囲気、物語を彩っています。装丁も素敵で、表紙には、作品の内容を象徴するイラストがひとつひとつ配されています。（シヤムロックのゆかいな番人もいますよ／クローバーの茂みの陶器の人形）

この本は、図書館では児童書の棚に並んでいます。大人も充分に楽しめると思います。大人こそ、たっぷり楽しめるかもしれません。

高樓方子さんが訳した『小公女』もぜひ読んでみてください。

（熊本子どもの本の研究会 会員）